

トニ・モリスン『スーラ』におけるエロティックな身体

石 川 千 暁

はじめに

『スーラ』(*Sula*) はアフリカ系アメリカ人作家トニ・モリスン (Toni Morrison) の2作目の小説で、1973年に出版されました。フェミニスト文学の一つの達成と見なされることの多い本作ですが、あらすじは以下のようなものです。ボトムという黒人の集落に暮らしていた二人の黒人少女スーラ (Sula) とネル (Nel) は8歳の時に出会い、固い友情で結ばれます。この友情はしかし、二人が成人して、ネルの夫ジュード (Jude) とスーラが性交したことにより、失われてしまいます。その後25年が経過し、すでにスーラは他界しているのですが、ネルはようやくカタルシスを経験して、失って本当に悲しかったのはジュードではなくスーラだったのだと認識し、女どうしの絆が遅まきながら回復されるのです。

本日の発表では、この絆の回復が、黒人レズビアンフェミニストである詩人オードリー・ロード (Audre Lorde) の言うエロティックな力に深くかかわっていると話しします。近年のセクシュアリティ研究で重要視されている1978年の論考において、ロードは、生きることで経験するあらゆる感覚に自覚的である様をエロティックと呼び、女性の身体の自律性を示す兆しとして提

示しました。モリスンが本作を通して描いているのは、ロードが理論化してみせたエロティックな身体的自覚とそれが可能にするエンパワーメントだと考えられます。ロードの唯物論を予見するかのように、本作の心理描写は、しばしば身体状況に触れます。結末部分でネルは「私たちは一緒に女の子だった」(Morrison 174)と、いまは亡き親友スーラを憶ってつぶやき、ようやく「喪失」を受け入れます。そしてそれは、「胸を押しつけ、喉に込み上げて」くる何かとして経験されているのです(174)。このような描写を通してモリスンは、黒人女性の身体をエロティックな力の源として再定義しつつ、身体に根ざした自己認識を女性の親密性の条件として提示しているのだと考えられないでしょうか。

以下では、身体的感覚、とりわけ中心人物であるスーラにとっての痛みを中心に検討していきます。それを通して、本作が異性愛規範の硬直性をゆるめるような視座を提供していることだけでなく、モリスンが近年の臨床医学で認識されつつある身体感覚の重要性を正しく理解していたのだということを示したいと思います。

1. 黒人女性とエロティックなエンパワーメント

これまでスーラとネルの友情は、レズビアン的とも同性愛とは違うとも評されてきました。異性愛制度に抵抗するレズビアン小説として評価するバーバラ・スミス(Barbara Smith)のような批評家がいる一方で、バーバラ・ジョンソン(Barbara Johnson)に代表されるように、隠れされたレズビアンの物語としては読めないという論者も存在します。少女時代のスーラとネルが草や枝を手にして土を掘るという遊びに興じるという場面があるのですが、鵜殿えりかななどが指摘するように、性的なイメージにあふれています。この戯れの場面と、それを目撃したらしいチキン・リトル殺害場面のクロスリーディングを通して、鵜殿はレズビアン・セクシュアリティを描き出そうとしていると結論しています。モリスン自身はインタビューで『スーラ』に同性愛は存在しないと述べており、この友情の精神的・情緒的な属性を強調していますが、二人が非規範的なクィアな快楽の経験をともにしていることは否定しがたいでしょう。

さらに、クィアな性の表現を黒人の貧困と関連づけるストックトン(Kathryn Bond Stockton)は、本作において尻に関連する言葉—— ass, buttocks, bottom, behind など——が頻出していることを指摘しています。そして、ボトムに暮

らす黒人男性たちは「無職であるという受動性」(Stockton 76)を生き、社会の底辺に位置する悲しみを経験しているだけでなく、尻の快楽も得ているという大変興味深い議論を展開しています。本作の尻に対するオブセッションについては、例えば、エヴァが赤ん坊プラムを救うために便所で尻にロードを押し込むという場面を思い出していただければ良いかと思います。

このように『スーラ』が、タブー視されているような性的な想像力をかき立てるテキストであることは疑い得ません。本発表では、本作を特徴付けるクィアな想像力を、身体の自覚 (awareness) という観点から再検討し、その政治的可能性について探っていきます。オードリー・ロードは、1978年の学会で発表された論考「エロティックなものの使い方」において、副題に掲げられた「力としてのエロティックなもの」という概念を提唱しました。このエッセイは「エロティックなものに関する(黒人)フェミニストによるもっとも徹底した取り組み」(Holland 53)と見なされ、近年セクシュアリティ理論の分野で重要視されています。例えばモノガミー規範を相対化しようと試みるアンジェラ・ウィリー (Angela Willy) は、セクシュアリティを中心に据えないロードの身体の捉え方を、新しい being と belonging のヴィジョンを切り拓く可能性を秘めたものとしてきわめて高く評価しています (23)。

ロードは、エロティックなものを、単に性的なだけでなく「表現されていないか認識されていない感情/感覚の力に根づいた深く女性的で精神的な平原にある、私たちひとりひとりの内にある資源」(Lorde 87)として再定義しています。このエロティックな資源を歓迎することは「女性の生命力の主張」(89)をすることであり、内なる声としてのエロティックな指針にしたがって生きる女性は「危険」(88)とみなされるほどの自由を得るのだとロードは言います。彼女の考えるエロティックな作用は、感情的な奥行きと、他者との共有を前提とする点で、ボルノグラフィーやフェティッシュの刺激とは区別されます。ロードに特徴的なことであり、ウィリーのような研究者が評価する点ですが、エロティックな力は主体の自律性をおびやかす性的欲望とは異なり、一種の「能力」(Willy 130)ととらえられており、政治的な連帯の契機となると主張されているのです。というのも、感情や感覚を表現し合うことは、「差異という脅威を小さくする」(Lorde 89)からです。

こうしてロードは、エロティックなつまり、身体的かつ感情的な一自覚にもとづいたウェルビーイングと政治的なエンパワーメントを結びつけます。一方で、そのようなエンパワーメントは、「排他的なヨーロッパ系アメリカ人男

性の伝統のもとで動き続ける女性たちとはなかなか共有されない」とも述べられます (91)。白人至上主義や性差別を受け入れている女性は、外から与えられる命令に気が向いているので、自らの内なる声を聞くことができないというわけです。

ここで強調したいのは、ロードの考えるエロティックな主体性の内向的な性質です。社会的抑圧からの自由や解放の土台を、身体の内には生じる感情や感覚に見るというロードの議論は、『スーラ』におけるモリスンの関心を照らし出してくれるように思われるからです。

「感情にふるまいを決めさせる」(Morrison 141)と書かれているスーラはロードの言うエロティックな強さを持った人物であり、実際、「危険」(121)と見なされる「のけ者」(122)です。彼女をエロティックな指針にしたがって生きる黒人女性主体と見なせば、1983年のインタビューでロードが彼女を「力と痛みにとらわれた究極の黒人女性」と呼び、本作をきわめて高く評価していることも、驚くにはあたらないでしょう (“Interview” qtd in Ferguson 126)。ロードにとって、通常人々が避けようとする痛みもまた、深く認識したり率直に表現されるべき感覚です。エロティックなエンパワーメントとは、痛みの可能性にさらされている、脆くて傷つきやすい身体を十分に経験することなしにあり得ない企てだということができるでしょう。そして実際、モリスンの小説の主人公が少女時代から死を迎えるまで行っているのは、力と痛みを身体において自覚し、経験することなのです。

2. 『スーラ』におけるエロティックな絆

笑い、泣き、人を殺め、性交し、歌い、眠り、病に罹り、死んでいくスーラは、広範囲にわたる感覚に開かれており、とりわけ痛みに通じています。彼女は「自分が痛みを感じることを人に与えるのと同じくらい進んでし、自分が喜びを感じることも与えるのと同じくらい進んで」する人物です (Morrison 118)。自分自身の内なる出来事として、快楽だけではなく苦痛にも等しく注意を払うのが、社会規範にとらわれず主体性を確保し続けるスーラの技術なのです。

モリスンのテキストは至るところでスーラが経験する痛みに触れていますが、ここでは彼女が痛みを歓迎し、ネルとの結束の証左として提示している例を挙げてみたいと思います。少女時代のある日のこと、二人が白人の少年たちに絡まれる場面があります。スーラはポケットから取り出した果物ナイフで自

分自身の指を切りつけ、少年たちに向かってこう言います—「自分にこんなことができるんだったら、あんたたちに何すると思う？」(54-55)。ネルの目には奇妙にしか映らず、結果としてスーラの顔が「何マイルも離れている」(55)ように感じられるこの行為と発言は、本人にとっては二人のエロティックな絆のパフォーマティヴな宣言だったのではないかと思います。痛みと歓びとを等しく尊重するスーラにとって、ネルのために自身の身体の脆さをさらけ出し、苦痛を受け入れることは、快楽を共有することと同程度に親密な身振りであるはずだからです。スーラの発言を受けて少年たちが黙って逃げ出すことは、エロティックな自覚にもとづく女どうしの連帯が、抑圧に対する抵抗の術となりうるというロードの説をドラマティックに裏付けてもいます。

「寂しさに酔ってしまうほど孤独な少女たち」(51)であったスーラとネルは、こうして、テキストの言葉によれば「たえまない感覚の共有」(95)を通じて「自分たちの物事の知覚に集中する」(55)ことができるようになります。その過程で、少女期の二人は、先ほど触れました引用1のクシアな快楽の経験をとものにします。この戯れによって「語りようのない落ち着いたなさど興奮」(59)を高まらせた二人は、それを目撃したらしいチキン・リトルを抹消する行為を通じて、近年認識されているように、「オーガズム的な解放」(Jenkins 83)を共有していると言うことができるでしょう。

アウトローであるスーラは危険視され、ボトムの人々からすると「通常の脆さの兆しが一切なかった」(Morrison 115)ように見えるほどである一方で、ネルのエロティックな、身体に根ざす内向きの自己認識は、結婚を機に失われていきます。「[[ネル]がかぶっていたヴェールは重すぎて、彼が彼女の頭に押しつけたキスの芯を感じることはできなかった」(85)という描写があります。結婚式においてネルが身体感覚から乖離していくのは、象徴的です。この結婚式を境にスーラは町を去り、二人がかつてのような歓びの共有をすることはありません(97)。

したがって、『スーラ』において少女たちが分かち合ったクシアな快楽は、最終的には、あくまでも過ぎ去った何かとして認識され、現在のリアルとして公然と祝福されることはありません。そうしたモリスンのアンビヴァレンスを理解するためには、黒人女性の性に関するステレオタイプを考慮に入れる必要があるでしょう。例えば黒人史研究のイヴリン・ハモンズ(Evelyn Hammonds)が述べるように、黒人女性のセクシュアリティは、支配的な言説において「同時に不可視であり、可視化され(人目に晒され)、過剰に可視

化され、病理化されてきた」という複雑な歴史があります(170)。したがって、黒人女性人物にとってのクィアな快楽が失われた過去に属するものとして表象されることは、異性愛主義を擁護する身振りではなくて、反人種主義の身振りとして理解されるべきなのではないかと思います。

実際、黒人レズビアンフェミニストたちは、本作『スーラ』を、異性愛を前提とする家父長制のオルタナティヴを提示するテキストとして、おおいに歓迎してきました。黒人クィア研究の代表的な研究者であるロデリック・ファーガスン(Roderick Ferguson)は、本作について意見を表明することが、ロードを含む黒人レズビアンフェミニストたちが「フェミニストで、クィアで、反人種主義的で、連合体を形成するような政治運動を形づく」ることに貢献したと指摘しています(125)。モリスンが本作を執筆していた当時、しばしば女性を稼ぎ頭とする黒人の家族形態が病理化されていたという歴史的事実と照らし合わせてみる時、エヴァを家長とするピース家の女性たちのたくましいサヴァイヴァルは、それ自体が既存の人種的・性的ナラティヴに対する反論となっていると考えられるのです。

3. 痛みと親しむ—スーラの十全性

二人の友情は、スーラの死後ではあるのですが、ネルのメランコリーからの回復とともに取り戻されます。モリスンはフロイト的なメランコリーのモデルをなぞりつつ、精神的な出来事に身体的な奥行きを与えています。ネルのカタルシスをうながしたのが、スーラと共有したクィアな快楽の記憶の回復である点に、エロティックな力の癒しの作用を確認することができます。結末に先立つエヴァとのやり取りを通じて、チキン・リトルを二人で葬った記憶とともに、その不道德性ゆえに抑圧されていた「喜ばしい興奮」(170)がよみがえっています。つまり、分かちあった喜びがあるからこそ、ネルは感情との長い断絶の末に「悲しみの円環」(174)にたどり着くことができるのです。スーラと夫ジュードの性交を目撃してしまったネルはメランコリーに陥り、喪失を正しく認識できずにいます。彼女が喪失した真の対象はスーラであったと認識し、ネルはメランコリーを脱するのは28年後のことです。決定的な二つの場面では、葉、泥、熟れすぎた緑のもの、というメタファーが共通して見られます。これらは幼少期のクィアな戯れの場面に見られたイメージの反復であり、スーラとの快楽の記憶が抑圧されていたことを表現していると考えられます。

特徴的なのは、カタルシスを経験する身体の反応が具体的に言及されている点です。「喪失が胸を押し、喉に込み上げて来」(174) だと、28年間流すことの出来なかった涙がようやく溢れだしています。今は亡きスーラにネルが親しげに呼びかけるのは「片目がひきつって、少し焼けるような感じがした」(174) 後であり、続けて「毛玉」(174) が壊れるのとともに、慕っていたのはジュードではなかったと自覚しています。スーラとジュードの性交を目撃した眼が記憶しているトラウマが、ここでは片目のひきつきりとして表面化したのかもしれませんが。身体とのつながりを取り戻したネルは、いわば胸と喉の圧迫感として喪失を経験しているのです。ちなみに、少女時代のスーラが母ハナが自分について「愛してはいるが好きではない」と友人に話しているのを聞く場面においても、スーラの心の痛みは目の中の刺すような痛みとして表現されています。

こうした描写はモリスンが、近年まで西洋の精神医学で軽視されてきた身体に蓄えられた記憶というものを正しく認識していたことを示唆しているようです。トラウマ臨床研究を牽引してきたベセル・ヴァン・デル・コーク (Bessel van der Kolk) によれば、今日ではトラウマ治療の分野でも症状の改善のために身体の感覚を自覚することは不可欠であると認識されているそうです。「トラウマの最中に刻み付けられた感情と身体的な感覚は、現在において、記憶としてではなく、混乱をもたらす身体反応として経験される」(van der Kolk 203)。したがって、変容をもたらすことができるのは、「内的経験に気づき、私たち自身の内側の出来事と親しくなることを習得することによってのみ」なのです (206)。より具体的には、「圧迫、熱、筋肉の緊張、疼き、陥没、空洞の感覚」といった「感情の下にある身体的感^{センセーション}覚」(209) が一過性のものであることを実感することが、トラウマ患者が過去の呪縛から解放されるための第一歩となると説明されています。確かに、『スーラ』において最もトラウマタイズされた人物と言えばシャドラックですが、彼はついに最後まで身体的な自覚を手に入れることがありません。

ヴァン・デル・コークの説明は、快感のみならず苦痛にも等しく敬意を払うスーラのエロティックな力が、科学的に見ても道理にかなったものであるということをはめかしています。身体が記憶した苦痛が絶え間なく持続するのがトラウマ的な状況である一方で、現在に生きるスーラは苦痛の一過性に注意を向けることに長けた人物です。すでに見たように、少女の頃から彼女はネルとの絆の中心に身体の脆さを据えていました。そんな彼女は成人し、病にかかる「痛みのいろいろな形」(Morrison 148) をつぶさに観察しています。彼女

に特徴的なのは、価値判断や言語による意味付けをすることがないという点です。身体的感覚に好奇心を持ちつつ、それでいて距離を保っているという、中立的な精神的立場をとっているのです。ちなみに、この場面に先立って痛み止めを飲んでいることから分かるように、スーラは決して苦痛を好んでいるわけではありません。単に不可避であると理解し、評価も批判もせずに共存するのです。

興味深いことに、苦痛を感じることを生の一部として受け入れるスーラの態度は、彼女の生まれ育ったボトムの黒人たちが、自然の脅威や社会不適合者に応じる方法に通じています。過酷な怪奇現象に「彼らはほとんど歓迎と言っているような受け入れの姿勢で対応した」(Morrison 89)。自分たちの身を守るために、避けたり、対策を練ったりする必要は感じていたものの、「自然の成り行きをたどって満足するのに任せて、変えたり減ぼしたり再び起こらないようにするための方策を考案することは決して」なかった(89-90)。というのも、怪奇現象の発生は「不都合なだけ」であって、彼らは「自然がゆがんでいるとは思わなかった」からなのです(90)。スーラという不穏なアウトサイダーについて言われているように、彼らにとって「怪奇現象は恩寵と同じぐらい自然の一部」(118)なのです。これと同様に、スーラにとっても、痛みは不愉快なだけであって、その存在によって彼女の身体に欠陥があるとか、人生が不完全なものであるとかいう価値判断は行われないうのです。いわば、時間の経過とともに雲の様子が変わっていくように、身体に生じる痛みが変化していくのを自然の成り行きとして、スーラは静かに観察するのです。

まもなく彼女は死を迎えるのですが、孤独に死に行く彼女が浮かべる微笑みが示しているのは、身体の脆さをほとんど楽しむような態度です。先立つ場面で、ふさがれた窓の「否定しようのない結末感」に「なだめ」られて、「完全に一人」(148)であることを確認すると、母の子宮へと戻っていくかのような動作を彼女は想像します。「脚を胸のところで抱え、目を閉じ、親指を口にくわえてトンネルまで浮かんでくぐって行く」(149)という姿は、自然のサイクルにしたがった再生を予感させるものです。そして逃避や抵抗の素振りを見せずに、スーラはひとり死を迎えます。

へとへとになりながら予感に浸った状態で、彼女は自分が息をしていないこと、心臓が止まったことに気づいた。恐怖のひだが彼女の胸に触れた。彼女の脳の中で激しい爆発が、呼吸するためのあえぎがいまに起こるに決

まっているから。そして、痛みはやってこないということを彼女はさとした。いやむしろ、感じた。息をしていないのは、必要がないからだった。彼女の体に酸素は要らなかった。彼女は死んでいた。

スーラは自分の顔が微笑むのを感じた。「ああ驚いた」彼女は思った、「痛くさえなかった。いつかネルに話さなきゃ。」(149)

黒人女性についてのあらゆるネガティブなステレオタイプは、呼吸を止めた身体と恐怖を感じている精神の動きが描写されるこの場面において、効力を失います。自然の成り行きをたどって生き、喜びと痛みを味わい、死んで行くエロティックな主体たるスーラの姿を通して、モリスンは、黒人女性の身体の十全性を祝福しているのではないのでしょうか。支配的な言説に左右されない彼女たち独自の価値観—テキストの言葉では「ほかの何か」—を作り出すとは、この文脈においては、苦痛やその先にある死をも包含するような生命力を表現することでもあります。

ただし自然の法にしたがう十全性と申しまして、異性愛イデオロギーと対になった本質主義的なジェンダー規範の正当化に携わっているわけではもちろんありません。本作において異性愛はむしろ、混乱をもたらすものとして描かれています。男性との性交はスーラにとって感情と身体が乖離する経験です。

彼女が自分の体と協力するのをやめて、行為のなかで自分自身を主張しはじめた時、鉄のくずが広大な磁場の中心に引き寄せられて行くように、彼女のなかで強さの粒子が集まって、決して壊せないようなぎっちりした塊をかたちづくった。自分の永続的な強さと無限の力を感じながら、だれかの下に降伏の体勢で横たわっていることには、最大の皮肉と憤りがあった。(123)

ここでスーラは永続的な強さと無限の力を感じ、エロティックな頂点を極めています。動作の上では降伏の体勢で横たわっているにすぎないという点を考慮すれば、モリスンが思い描いたエロティックな主体性とは、アメリカ社会が逸脱とみなす黒人女性の身体をそれ自体で完全なものと自らが「感じる」ことだ、と言うことができそうです。スーラが築き上げる強さの塊はいとも簡単に壊れてしまい、彼女は「狼狽」します(123)。性的興奮を自己の破壊と表現したレオ・ベルサーニ Leo Bersani を思い起こさせますが、白人でも男性でもないスー

ラにとっては、この自己破壊はマゾヒスティックな陶醉をもたらすものではありません。「皮肉と憤り」とともに経験されるほかありません。こうした混乱が黒人女性にとっての異性愛の親密性につきまとうのであり、女どうしの連帯がもたらすかもしれない癒しや解放とは程遠いのです。要するに、テキストの言葉を借りるなら、黒人女性にとって「恋人は仲間ではないし、決してなり得ない」わけです (121)。こうして、痛みにかかっていることで可能になるエロティックな身体的自覚は、女どうしのつながりの土台となるのみならず、男性との性的経験の矛盾をさらすという意味においても、異性愛規範を相対化することに貢献しているのだと考えることができます。

本発表ではオードリー・ロードが理論化したエロティックな主体性という観点から『スーラ』を分析し、身体的な感覚、とりわけ痛みが中心人物によってどう扱われているかが、最終的な連帯の可能性を左右する要因となっていると論じてまいりました。人種主義のアメリカ社会を背景とした黒人女性の物語が、痛みと無関係であるはずがありません。本作『スーラ』は痛みを拒絶するのではなく出発点として、脆さを受け入れることの変容力を追究しているようです。その過程において、作家モリスンの洞察力が書き込んでいたのは、科学がようやく認識しつつあるような身体の記憶でもありました。こうして本作『スーラ』は、出版から45年を迎えようとしている今日においても、挑発的にパワフルでパインフルなテキストとして、私たちの精神そして身体を刺激し続けているのです。

参考文献

- Ferguson, Roderick A. *Aberrations in Black: Toward a Queer of Color Critique*. U of Minnesota P, 2004.
- Hammonds, Evelyn. "Toward a Genealogy of Black Female Sexuality: The Problematic of Silence." *Feminist Genealogies, Colonial Legacies, Democratic Futures*, edited by M. Jaqui Alexander and Chandra Talpade Mohanty, Routledge, 1997, pp. 170-82.
- Holland, Sharon Patricia. *The Erotic Life of Racism*. Duke UP, 2012.
- Jenkins, Candice M. *Private Lives, Proper Relations: Regulating Black Intimacy*. U of Minnesota P, 2007.
- Johnson, Barbara. "Lesbian Spectacles: Reading *Passing*, *Sula*, *Thelma and Louise*,

- and The Accused.*" *Media Spectacles*, edited by Marjorie B. Garber, Jann Matlock, and Rebecca L. Walkowitz, Routledge, 1993, pp. 160-66.
- Lorde, Audre. "The Uses of The Erotic: The Erotic as Power." *Sexualities and Communication in Everyday Life: A Reader*, edited by Karen E. Lovaas and Mercilee M. Jenkins, Sage, 2007, pp. 87-91.
- Morrison, Toni. Sula. Vintage, 2004.
- Smith, Barbara. "Toward a Black Feminist Criticism." *African American Literary Theory: A Reader*, edited by Winston Napier, New York UP, 2000, pp. 132-46.
- Stockton, Kathryn Bond. *Beautiful Bottom, Beautiful Shame: Where "Black" Meets Queer*. Duke UP, 2006.
- van der Kolk, Bessel. *The Body Keeps the Score: Brain, Mind, and Body in the Healing of Trauma*. Viking, 2014.
- Willy, Angela. *Undoing Monogamy: The Politics of Science and the Biopossibilities of Biology*. Duke UP, 2016.
- Wilson, Judith. "A Conversation with Toni Morrison." *Conversations with Toni Morrison*, edited by Danielle Taylor-Guthrie, UP of Mississippi, 1994, pp. 129-37.
- 鵜殿えりか 『トニ・モリスンの小説』、彩流社、2015 年。